

## 「新聞を読む習慣による学力向上」を巡る計量分析 (2) : 新聞を読んで自信をつけた子どもの規定要 因を巡る多変量解析

坂巻, 文彩  
九州大学大学院人間環境学府 : 学術協力研究員

陣内, 未来

徳永, 真直

西郡, 大

他

<https://doi.org/10.15017/7162229>

---

出版情報 : 九州大学教育社会学研究集録. 26, pp.1-15, 2023-09-30. 九州大学大学院人間環境学府教育  
社会学研究室  
バージョン :  
権利関係 :

## 「新聞を読む習慣による学力向上」を巡る計量分析（2）

### － 新聞を読んで自信をつけた子どもの規定要因を巡る多変量解析－

#### A Quantitative Analysis of “Academic Achievement Enhancement through Newspaper Reading Habit”(2)

#### -- Multivariate analysis on the determinants of children's confidence in reading newspapers--

坂巻文彩・陣内未来・徳永真直・西郡大・中世古貴彦・木村拓也

### 1. 問題の所在－「新聞を読む習慣」と自信の関係性に着目する必要性

学習到達度調査（PISA）の結果を受け、「読解力」の低下（文部科学省・国立教育政策研究所 2019、p.1）が叫ばれる中、「新聞を読む習慣」による学力向上」に注目が集まっている。

特に、「新聞を読む習慣による学力向上」に関する調査研究は、文部科学省、国立教育政策研究所だけでなく個人研究としても、多く積み重ねられてきた（詳細は、木村・陣内ほか 2023、pp.27-30）。

これらの研究から「新聞を読むと学力が向上する」という言説は、「全国学力・学習状況調査」等を用いて、一定の証明が行われている（例えば、木村・陣内ほか[2023]に詳細な記載あり。文部科学省・国立教育政策研究所[2021]など）。これらの研究の中には、新聞を媒介にした親子コミュニケーションも含めた研究もあった。例えば、お茶の水女子大学の研究（2014・2018）では、家庭の社会経済的背景（Socio-Economic Status：SES）を統制しても、「子どもに本や新聞を読むように勧めている」ことは、学力には影響があることを示している。他にも、お茶の水女子大学が文部科学省から委託を受けた「教育格差の発生・解消メカニズムの調査研究」がある。この研究では、「親の子どもへの接し方」と学力との関係性を検討しているが、国語と算数の成績の上位層の方が、親が「ニュースや新

聞記事について子どもと話す」傾向にあるという（浜野 2009、p.65）。本研究と同データを用いて分析した木村・陣内ほか（2023）では、子どもを十分に褒めることにより学力が向上したことを示している（木村・陣内ほか 2023、p.65）。

「新聞を読む習慣による学力向上」が認知されるようになってきているが、前提として、子ども自身の学習意欲を高めたり、学習の動機付けを行うことも重要である。国立教育政策研究所（2023）の「令和5年度全国学力・学習状況調査の結果」では、主体的・対話的で深い学びや個別最適な学びが、児童生徒の自己有用感等に影響を与えている可能性があることを示している。

ベネッセ教育総合研究所は、小学5年生から6年生にかけての1年間に焦点をあて、読書の実態調査を行った。この報告によると、読書の量が多い児童の方が、読み方を工夫したりしているという（ベネッセホールディングスブランド広報部 2019）。読書や新聞を読む習慣を通じて、子どもが自ら最適な学び方を修得することが可能であり、そのことにより、学習意欲を高めたり学習を動機づけることも可能になってくることが予測できる。

子どもの自信を高めることが、学習意欲を高める方法の一つとして考えられる。一般的に、日本の子どもは、自己評価が低いと言われている。内閣府（2019）の調査によると、「自分自身について満足している」という回答比率が、アメリカが57.9%、韓国が36.3%で

あるのに対し、日本は 10.4%である（内閣府 2019、p.8）。また、日本の若者は、「自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」場合に、「自分自身に満足している」と回答する傾向にあると分析している（内閣府 2019、pp.18-19）。

子ども自身が自信を高める場として、学校だけでなく家庭も考えられる。フォーマル教育だけでなくインフォーマルな教育も重要視される今日、「新聞を読む習慣」により、子ども自身の自信を高められるかどうかは、着目すべき研究課題でもある。

## 2. 先行研究

先述通り、「新聞を読む習慣による学力向上」に関する実証研究と親子コミュニケーション研究は、数多く行われてきている（詳細は、木村・陣内ほか（2023、pp.30-31）。本稿と同データを用いて、木村・陣内ほか（2023）は、学力を昨今の教育政策の状況を踏まえ、「考える力」「考えをまとめる力」「考えを伝える力」の3つに分け、子ども自身の介入（10分トレーニング）前後の自己評価（「考える力」「考えをまとめる力」「考えを伝える力」の伸び）について検討を行っている。介入（10分トレーニング）が親子コミュニケーションを促す良い機会となり、子どもを十分に褒めることなどによって学力が伸びることなどを明らかにしている（木村・陣内ほか 2023、p.64）。

子どもの自信を高める教育の研究や子どもの自信を高める教師、保護者の関わり方の研究は、蓄積されつつある<sup>(1)</sup>。

子どもの自信を高める教育の研究として、松田・溝邊（2019）、神谷・磯部ほか（2015）等がある。

松田・溝邊（2019）は、小学4年生を対象に、理科の授業で、授業過程における概念の理解と自信の程度の関係ならびにその変化過程を捉えた。先行概念で正しく概念を理解していても、自信度の高い児童はいないという。授業過程における自信の程度の変化をみると、多くの児童は、実験を繰り返すことで自信を高めていると述べている（松田、溝邊 2019、p.72）。つまり、自信の程度の変化過程には、様々なパターンが見

られるが、「矛盾する事象」と「科学的概念を裏付ける事象」の経験を含めて、自ら行う実験が概念の変容契機と自信の向上につながっていたと示している（松田・溝邊 2019、pp.73-74）。

神谷・磯部ほか（2015）は、小学5年生を対象に、家庭科の授業で、授業実践の前後における調理操作の自信の変化について検討した。個人の調理操作に関する自信の程度は実践後に上昇しており、授業での経験が大きく影響したという。理論的な裏付けを行うことで、「ゆでる」「だしをとる」という2つの操作は実践前と比べて実践後で自信は大きく高まった、と述べている。さらに、実践前に調理経験の少なかった児童の方が宿題で考えたレシピを実際に調理した割合が高く、宿題を通して調理を経験することで自信も高まったことを示している（神谷・磯部ほか 2015、pp.329-330）。

子どもの自信を高める教師、保護者の関わり方の研究として、大場・甫仮（2018）、郭・田中ほか（2018）等がある。

大場・甫仮（2018）は、小規模小学校の小学5年生を対象に、書く力を高め、児童が自信をもてるようになるための実践教育を行い効果を確かめた。この報告によると、書くことについての自信を高めるためには、指導の際に、書く度に褒めるなどの4つの観点を重視することの必要性を示した（大場・甫仮 2018、p.101）。

郭・田中ほか（2018）は、京都市内の公立中学校10校の中学2年生およびその保護者を対象に、子どもの自己肯定感に影響を及ぼす要因について検討した。この検討から、「経済的要因」は自己肯定感への影響はあるが、「親への信頼」といった「関係性の要因」が子どもの自己肯定感にとってより重要であることを示した（郭・田中ほか 2018、p.27）。

## 3. 研究課題の設定

先行研究を整理した結果、第一に、実験、調理操作を繰り返すことにより経験値が高まることで、自信が高まることが明らかにしている一方で、経験が少ない方が自信が高まったという指摘がある。第二に、子ど

もの自信を高めるには、教師、保護者の関わり方が重要であることが示している。先行研究では、新聞を活用した教育と子どもの自信との関係性を検討した研究は多くはない。

先述の通り、木村・陣内ほか（2023）では子ども自身の介入（10分トレーニング）によって、学力（「考える力」「考えをまとめる力」「考えを伝える力」）が伸びることを明らかにしているが（木村・陣内ほか 2023、p.64）、本研究では、学力に対する自信を規定する要因に焦点をあてて、検討する。

調査対象者・調査手続きの概要と測定概念の設定・調査票の概要・手続きと倫理的配慮については、木村・陣内ほか（2023）に詳述してある。ここでは、抜粋して、簡潔に示しておく。

調査は、2022年2月から8月までに実施された。調査対象者は、全ての調査に回答があった、233人（家族）であり、この回答を分析対象とした（有効回答率63.5%）。内訳は、児童の性別が、男子117人（50.2%）、女子112人（48.1%）、回答しない4人（1.7%）、学年が、5年生145人（62.2%）、6年生88人（37.8%）であった。

調査手続きの概要と測定概念の設定については、以下の通りである。「新聞を読む習慣による学力向上」の効果を測定することに際しては、介入として西日本新聞社の「10分トレーニング」を活用した。「10分トレーニング」とは、新聞記事を題材にした問題と、保護者と子どもが会話するポイントをメールで送信し、それを保護者が受信して、子どもと会話を行うものである。

今回の調査協力者には、介入として「10分トレーニング」のモニターを4か月（課題の頻度週3回）体験してもらい、その間、新聞を通じた親子の会話を実践してもらった。

また、測定概念と測定方法については、本研究では、学力検査ではなく、親子の会話を生むツールとして開発された、「10分トレーニング」で出されている課題を事前事後に作文形式で児童に書いてもらうことで、学力、特に「表現力」の代替指標として測定する方法を採用した。

併せて、間接評価とはなるが、2017年（高等学校は2018年）に告示された学習指導要領の中で明記されている「思考力」「判断力」「表現力」について、「考える力」「考えをまとめる力」「考えを伝える力」と独自に言い換え、それらの力について、子どもの取り組み事前事後の自信、保護者から見た子どもの評価を回答してもらった。

本調査にあたっては、4つの調査票と2つの作文課題によってデータを収集した。

なお、本調査については、研究内容、実施期間、調査対象、侵襲性の有無、インフォームドコンセント、対象者との権力関係、調査対象者の利益・不利益、データの保存方法と期間、調査対象者への配慮、個人情報保護、人権保護、法令の遵守などを報告し、九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門研究倫理委員会（倫理審査承認番号：21-010、承認年月日：2022年3月4日）の承認を得て実施した。

#### 4. 研究データの概要

本分析で使用する変数の記述統計量（最小値、最大値、平均値、標準偏差）は、表1の通りである。

従属変数は、「児童事後調査：『考える力』に自信がある」「児童事後調査：『考えをまとめる力』に自信がある」「児童事後調査：『考えを伝える力』に自信がある」という3つの変数と『考える力』に自信がついたダミー』『考えをまとめる力』に自信がついたダミー』『考えを伝える力』に自信がついたダミー」という自信の変化の状況をみた3つの変数の合計6変数である。

後3者の変数であるが、『考える力』に自信がある』『考えをまとめる力』に自信がある』『考えを伝える力』に自信がある」という質問項目は事前調査・事後調査の両方にある。そこで、両調査の回答の数値を比較し、事前調査<事後調査の場合を1、左記以外の場合を0と設定した。

独立変数については、表3に示した通り、22変数で、性別ダミー、両親の学歴ダミー（属性）、学力の伸びの自己評価や取り組み（児童要因）、保護者による取

り組みや褒め方（保護者要因）が含まれる。独立変数については、木村・陣内ほか（2023）に詳細な説明があるので参考にされたい。

先述通り、本研究では、学力に対する自信を規定する要因検討するため、主に、以下 2 つの検討を行う。

第一に、子どもの学力の自信を規定する要因を検証

するため、属性、児童要因、保護者要因を投入して、階層的重回帰分析を行う。

第二に、介入（10分トレーニング）の前後で、自信を高めた要因を探るべく、属性、児童要因、保護者要因を投入して 2 項ロジスティック回帰分析を行う。

表 1 記述統計量

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
児童事後調査：「考える力」に自信がある	233	1	5	3.95	.913
児童事後調査：「考えをまとめる力」に自信がある	232	1	5	3.75	.988
児童事後調査：「考えを伝える力」に自信がある	232	1	5	3.77	1.112
「考える力」に自信がついたダミー	232	0	1	.40	.490
「考えをまとめる力」に自信がついたダミー	232	0	1	.36	.480
「考えを伝える力」に自信がついたダミー	232	0	1	.45	.499
男子ダミー	233	0	1	.50	.501
6年生ダミー	233	0	1	.38	.486
母親大卒ダミー	233	0	1	.53	.500
父親大卒ダミー	233	0	1	.64	.480
児童事後調査：「考える力」が伸びたと思う	233	1	5	4.24	.773
児童事後調査：「考えをまとめる力」が伸びたと思う	233	1	5	4.06	.936
児童事後調査：「考えを伝える力」が伸びたと思う	233	1	5	4.15	.860
児童事前調査：新聞を読む頻度	232	1	4	1.90	1.042
児童事前調査：本（マンガを含まない）を読む頻度	233	1	4	3.15	.882
児童事前調査：マンガを読む頻度	233	1	4	2.78	1.090
児童事後調査：10分トレーニングが楽しかったと思う	233	1	5	4.09	.974
児童事後調査：10分トレーニングをまたやりたいと思う	233	1	5	3.87	1.036
母親取り組みダミー	233	0	1	.85	.354
取り組み多いダミー	233	0	1	.50	.501
両親が褒めてくれるダミー	226	0	1	.33	.470
褒めてくれる人増えたダミー	226	0	1	.20	.404
両親とも社会のことについては話すダミー	225	0	1	.24	.431
社会について話す相手が増えたダミー	225	0	1	.29	.454
保護者事後調査：子どもと10分トレーニングをやっていて楽しかった	233	1	5	3.85	.800
保護者事後調査：子どもに10分トレーニングをまたやらせたいと思う	233	1	5	3.97	.843
保護者事後調査：「10分トレーニングマニュアル」は子どもを褒めるコツを掴むのに役立ったと感じる	233	1	5	3.65	.827
保護者事後調査：10分トレーニングのトレーニングガ利用ガイド（オレンジの冊子）の「褒め方のコツ」や「褒め方、問いかけ例」を、10分トレーニングの実施に際して参考にしましたか？	233	1	4	3.10	.621

## 5. 子どもの学力の自信を規定する要因の検証

### 5.1 階層的重回帰分析

以下では、子どもの学力の自信を規定する要因を検証するため、属性、子ども要因、保護者要因を階層的に投入したモデルを検討する。ここでは、性別や学年、保護者学歴などの属性変数を踏まえても尚、子ども自

身の学力の伸びの自己評価や取り組み（児童要因）、保護者による取り組みや褒め方（保護者要因）が有意に効果を示すか否かも検証したい。そのため、上記 3 要因を独立変数とした階層的重回帰分析を行う。

#### 5.1.1 従属変数との相関関係

先述したように、本研究では、従属変数として、「児童事後調査：『考える力』に自信がある」「児童事後調

査：『考えをまとめる力』に自信がある」「児童事後調査：『考えを伝える力』に自信がある」という3つの変数を使用する。この3つの変数は、独立変数として使用する「児童事後調査：『考える力』が伸びたと思う」「児童事後調査：『考えをまとめる力』が伸びたと思う」「児童事後調査：『考えを伝える力』が伸びたと思う」という変数と意味合いが近いので、全独立変数を含めて相関関係を確認する。

各従属変数ごとにみた相関分析の結果は、表2の通りである。各従属変数と児童事後調査：『考える力』が伸びたと思う」「児童事後調査：『考えをまとめる力』が伸びたと思う」「児童事後調査：『考えを伝える力』

が伸びたと思う」との相関は、いずれの場合も、統計上、有意になっている。確かに、他の独立変数と相関係数を比較すると高い点は否めないが、最も相関が高い場合でも、従属変数である「児童事後調査：『考えを伝える力』に自信がある」と独立変数である「児童事後調査：『考えを伝える力』が伸びたと思う」という変数の関係性（相関係数：.538、0.1%水準）であり、中程度の相関である。よって、本研究で、階層的重回帰分析に、児童事後調査：『考える力』が伸びたと思う」「児童事後調査：『考えをまとめる力』が伸びたと思う」「児童事後調査：『考えを伝える力』が伸びたと思う」という3つの独立変数を投入する。

表2 事後の「考える力/考えをまとめる力/考えを伝える力」に自信があると各独立変数との相関関係

	児童事後調査：「考える力」に自信がある	児童事後調査：「考えをまとめる力」に自信がある	児童事後調査：「考えを伝える力」に自信がある
男子ダミー	-.028	-.120 +	-.115 +
6年生ダミー	-.043	-.090	-.052
母親大卒ダミー	.116 +	.059	.059
父親大卒ダミー	.106	.112 +	.111 +
児童事後調査：「考える力」が伸びたと思う	.476 ***	.401 ***	.347 ***
児童事後調査：「考えをまとめる力」が伸びたと思う	.508 ***	.483 ***	.429 ***
児童事後調査：「考えを伝える力」が伸びたと思う	.410 ***	.364 ***	.538 ***
児童事前調査：新聞を読む頻度	.181 *	.188 **	.164 *
児童事前調査：本（マンガを含まない）を読む頻度	.251 ***	.272 ***	.270 ***
児童事前調査：マンガを読む頻度	-.033	-.040	-.043
児童事後調査：10分トレーニングが楽しかったと思う	.310 ***	.251 ***	.241 ***
児童事後調査：10分トレーニングをまたやりたいと思う	.330 ***	.284 ***	.247 ***
母親取り組みダミー	-.010	-.019	-.065
取り組み多いダミー	.056	.007	.029
両親が褒めてくれるダミー	.244 ***	.214 ***	.179 **
褒めてくれる人増えたダミー	-.014	-.051	-.027
両親とも社会のことについては話すダミー	.277 ***	.215 ***	.193 **
社会について話す相手が増えたダミー	-.053	-.130 +	-.139 *
保護者事後：子どもと10トレをやっていて楽しかった	.119 +	.077	.100
保護者事後：子どもに10トレをまたやらせたいと思う	.099	.055	.068
保護者事後：「10分トレーニングマニュアル」は子どもを褒めるコツを掴むのに役立ったと感じる	.045	.030	.052
保護者事後：10分トレーニングのトレーニングガ利用ガイド（オレンジの冊子）の「褒め方のコツ」や「褒め方、問いかけ例」を、10分トレーニングの実施に際して参考にしましたか？	-.006	-.101	-.035

\*\*\* $p \leq .001$ 、\*\* $p \leq .01$ 、\* $p \leq .05$ 、+ $p \leq .10$

### 5.1.2 子どもの学力の自信を規定する要因

介入（10分トレーニング）の活動後の子どもの「考える力」「考えをまとめる力」「考えを伝える力」に関する自信

を規定する要因について、階層的重回帰分析により検討を行った。性別、学年、保護者学歴などの子ども・保護者の属性変数のみの場合（第1段階）、子ども自身の学力の伸びの自己評価や取り組み（児童要因）を追加投入した場合（第

2段階)、さらに保護者による取り組みや褒め方(保護者要因)を追加投入した場合(第3段階)に分けて分析した。

分析結果は、表3~5の通りで、VIFの値は、全独立変数との関係で、5以下であった。

「児童事後調査:『考える力』に自信がついた」を従属変数とした場合(表3)、子ども・保護者の属性変数、児童要因、保護者要因の全てを含めたモデル(第3段階)の決定係数が、.358と最も高く、最も当てはまりのよいモデルであるため採択した。

「児童事後調査:『考えをまとめる力』が伸びたと思う( $\beta = .293, p = .001$ )」「児童事後調査:『考える力』が伸びたと思う( $\beta = .258, p = .002$ )」が、正の有意な効果を得ており、「考える力」「考えをまとめる力」が伸びたと実感することで、「考える力」に関する自信が高まったものと思われる。

「児童事前調査:読書状況【本(マンガを含まない)】( $\beta = .123, p = .042$ )」についても、正の有意な効果を得ており、日頃から読書を行い「考える」習慣がある子どもが、介入(10分トレーニング)により、「考える力」について自信がついたものと思われる。

「両親とも社会のことについては話すダミー( $\beta = .188, p = .004$ )」で、正の有意な効果、「両親が褒めてくれるダミー( $\beta = .111, p = .088$ )」で、正の有意傾向の効果が得られた。保護者とコミュニケーションを取るほど、子どもの「考える力」に関する自信が高まっていくものと思われる。

「児童事後調査:『考えをまとめる力』に自信がついた」を従属変数とした場合(表4)、子ども・保護者の属性変数、児童要因、保護者要因の全てを含めたモデルの決定係数が、.305と最も高く、当てはまりのよいモデルとして採択した。

「6年生ダミー( $\beta = -.108, p = .067$ )」は、負の有意傾向の効果、「父親大卒ダミー( $\beta = .119, p = .055$ )」は、正の有意傾向の効果が見られた。6年生という最高学年としての立ち位置を意識したために、自己評価が厳しくなった可能性がある。

「児童事後調査:『考えをまとめる力』が伸びたと思う( $\beta = .372, p = .000$ )」「児童事前調査:読書状況【本(マンガを含まない)】( $\beta = .128, p = .042$ )」についても、「児童事後調査:『考える力』に自信がついた」を従属変数とした場合と同様に、正の有意な効果を得られた。日頃から読書を行う習慣がある子どもが、10分トレーニングを行うことで、

「考えをまとめる力」について自信がついたものと思われる。

「児童事後調査:『考えを伝える力』に自信がついた」を従属変数とした場合(表5)、子ども・保護者の属性変数、児童要因、保護者要因の全てを含めたモデルの決定係数が、.336と最も高く、最も当てはまりがよいためモデルとして採択した。

「父親大卒ダミー( $\beta = .143, p = .019$ )」、「児童事後調査:『考えを伝える力』が伸びたと思う( $\beta = .486, p = .000$ )」は、正の有意な効果が得られた。

「児童事前調査:読書状況【本(マンガを含まない)】( $\beta = .154, p = .012$ )」は、正の有意な効果、「両親が褒めてくれるダミー( $\beta = .111, p = .096$ )」は、正の有意傾向の効果が得られた。

「児童事後調査:『考える力』に自信がついた」「児童事後調査:『考えをまとめる力』に自信がついた」と同様に、日頃から読書を行う習慣がある子どもが、10分トレーニングを行うことで「考えを伝える力」の自信がついたものと思われる。「考える力」同様に、「両親が褒めてくれるダミー」については有意傾向がみられたことから、保護者が子どもの考えを肯定的に捉えることで、子ども自身の自己肯定感が高まることに繋がり、結果として「考えを伝える力」に関する自信も高まっていくものと思われる。

以上の階層的重回帰分析の結果を考えると、介入(10分トレーニング)による「考える力」「考えをまとめる力」「考えを伝える力」の自信を規定する要因として、日常的に読書を行うこと、保護者が子どもを褒めることが挙げられる。特に、日常的に読書を行うことは、学力に含まれる全ての力:「考える力」「考えをまとめる力」「考えを伝える力」の自信と関係性がある結果になったが、日頃から自分の考えを言語化する習慣があれば、新聞を読むことを通じた学力向上にも繋がるものと思われる。同様に、「考える力」「考えを伝える力」の自信を規定する要因として、両親が褒めることも挙げられるが、保護者が子どもを褒めることで、子どもが、自身の考えを肯定的に捉えることができ、自信が高まる可能性が窺える。保護者と子どもとの良好なコミュニケーションが学力向上に繋がるとも言えよう。

これらの結果は、子ども・保護者の属性、児童要因、保護者要因に含まれる全変数を投入して得られた結果である。

表 3 『考える力』に自信がついた（児童事後調査）」を従属変数とした階層的重回帰分析

	非標準化 係数	標準化 係数	有意確率	非標準化 係数	標準化 係数	有意確率	非標準化 係数	標準化 係数	有意確率
	B	β		B	β		B	β	
(定数)	3.825		.000 ***	.861	.019 *		.402		.422
男子ダミー	-.040	-.022	.737	.027	.015	.789	-.005	-.003	.963
6年生ダミー	-.114	-.061	.360	-.118	-.063	.264	-.145	-.077	.172
母親大卒ダミー	.182	.099	.157	.133	.073	.218	.106	.058	.327
父親大卒ダミー	.141	.074	.287	.194	.102	.085 +	.184	.095	.109
児童事後調査：「考える力」 が伸びたと思う				.252	.213	.008 **	.304	.258	.002 **
児童事後調査：「考えをまと める力」が伸びたと思う				.272	.279	.001 ***	.283	.293	.001 ***
児童事後調査：「考えを伝える 力」が伸びたと思う				.058	.054	.481	-.028	-.026	.744
児童事前調査：新聞を読む 頻度				.036	.040	.502	-.014	-.016	.791
児童事前調査：本（マンガを 含まない）を読む頻度				.104	.101	.093 +	.126	.123	.042 *
児童事前調査：マンガを読 む頻度				-.039	-.046	.408	-.030	-.036	.531
児童事後調査：10分トレ ニングが楽しかったと思う				-.068	-.073	.451	-.100	-.106	.282
児童事後調査：10分トレ ニングをまたやりたいと思 う				.129	.146	.124	.123	.139	.149
母親取り組みダミー							.040	.016	.783
取り組み多いダミー							.072	.040	.501
両親が褒めてくれるダミー							.216	.111	.088 +
褒めてくれる人増えたダミ ー							.095	.042	.524
両親とも社会のことについ ては話すダミー							.399	.188	.004 **
社会について話す相手が増 えたダミー							.099	.049	.470
保護者事後：子どもと10ト レをやっていて楽しかった							.093	.081	.249
保護者事後：子どもに10ト レをまたやらせたいと思う							.020	.018	.791
保護者事後：「10分トレー ニングマニュアル」は子ども を褒めるコツを掴むのに役 立ったと感じる							-.029	-.026	.684
保護者事後：10分トレー ニングのトレーニングガ利用 ガイド（オレンジの冊子）の 「褒め方のコツ」や「褒め 方、問いかけ例」を、10分ト レーニングの実施に際して 参考にしましたか？							.042	.029	.635
調整済み決定係数		.006			.311			.358	
F値		F=1.322	p=.262		F=9.700	p=.001		F=6.654	p=.001

\*\*\* $p \leq .001$ 、\*\* $p \leq .01$ 、\* $p \leq .05$ 、+ $p \leq .10$

表 4 『考えをまとめる力』に自信がついた（児童事後調査）を従属変数とした階層的重回帰分析

	非標準化 係数	標準化 係数	有意確率	非標準化 係数	標準化 係数	有意確率	非標準化 係数	標準化 係数	有意確率
	B	$\beta$		B	$\beta$		B	$\beta$	
(定数)	3.767		.000 ***	.960		.017 *	1.016		.073
男子ダミー	-.220	-.112	.088 +	-.153	-.078	.173	-.122	-.062	.296
6年生ダミー	-.200	-.098	.137	-.206	-.102	.075	-.219	-.108	.067 +
母親大卒ダミー	.075	.038	.586	.012	.006	.922	-.016	-.008	.897
父親大卒ダミー	.203	.099	.157	.271	.131	.029 +	.250	.119	.055 +
児童事後調査：「考える力」 が伸びたと思う				.121	.095	.240 **	.113	.089	.288
児童事後調査：「考えをまと める力」が伸びたと思う				.367	.349	.000 ***	.389	.372	.000 ***
児童事後調査：「考えを伝える 力」が伸びたと思う				.069	.060	.443	.047	.041	.626
児童事前調査：新聞を読む 頻度				.046	.048	.434	.028	.029	.649
児童事前調査：本（マンガを 含まない）を読む頻度				.153	.137	.025 +	.142	.128	.042 *
児童事前調査：マンガを読 む頻度				-.041	-.045	.428	-.009	-.010	.870
児童事後調査：10分トレー ニングが楽しかったと思う				-.153	-.151	.123	-.154	-.151	.142
児童事後調査：10分トレー ニングをまたやりたいと思 う				.165	.173	.072	.143	.150	.137
母親取り組みダミー							-.032	-.012	.846
取り組み多いダミー							-.002	-.001	.988
両親が褒めてくれるダミー							.205	.098	.151
褒めてくれる人増えたダミ ー							.129	.053	.443
両親とも社会のことについ ては話すダミー							.197	.086	.208
社会について話す相手が増 えたダミー							-.144	-.066	.350
保護者事後：子どもと10ト レをやっていて楽しかった							.047	.038	.605
保護者事後：子どもに10ト レをまたやらせたいと思う							.012	.011	.883
保護者事後：「10分トレー ニングマニュアル」は子ども を褒めるコツを掴むのに役 立ったと感じる							.030	.025	.704
保護者事後：10分トレー ニングのトレーニングガ利用 ガイド（オレンジの冊子）の 「褒め方のコツ」や「褒め 方、問いかけ例」を、10分ト レーニングの実施に際して 参考にしましたか？							-.109	-.069	.278
調整済み決定係数		.019			.289			.305	
F値		F=2.093	p=.083		F=8.788	p=.001		F=5.436	p=.001

\*\*\* $p \leq .001$ 、\*\* $p \leq .01$ 、\* $p \leq .05$ 、+ $p \leq .10$

表 5 『考えを伝える力』に自信がついた（児童事後調査）」を従属変数とした階層的重回帰分析

	非標準化 係数	標準化 係数	有意確率	非標準化 係数	標準化 係数	有意確率	非標準化 係数	標準化 係数	有意確率
	B	$\beta$		B	$\beta$		B	$\beta$	
(定数)	3.755		.000 ***	.366	.404		.687		.271
男子ダミー	-.239	-.108	.102	-.145	-.065	.239	-.130	-.058	.314
6年生ダミー	-.137	-.060	.366	-.141	-.061	.266	-.127	-.055	.337
母親大卒ダミー	.075	.034	.629	-.073	-.033	.576	-.081	-.036	.551
父親大卒ダミー	.225	.097	.166	.323	.139	.018 *	.339	.143	.019 *
児童事後調査：「考える力」 が伸びたと思う				-.093	-.065	.408	-.132	-.092	.262
児童事後調査：「考えをまと める力」が伸びたと思う				.148	.124	.135	.129	.110	.224
児童事後調査：「考えを伝え る力」が伸びたと思う				.619	.477	.000 ***	.630	.486	.000 ***
児童事前調査：新聞を読む 頻度				.042	.039	.512	.008	.008	.901
児童事前調査：本（マンガを 含まない）を読む頻度				.205	.163	.006 **	.193	.154	.012 *
児童事前調査：マンガを読 む頻度				-.050	-.049	.380	-.015	-.015	.801
児童事後調査：10分トレ ニングが楽しかったと思う				-.043	-.038	.690	.007	.006	.951
児童事後調査：10分トレ ニングをまたやりたいと思 う				.044	.041	.660	.023	.021	.831
母親取り組みダミー							-.242	-.078	.182
取り組み多いダミー							-.050	-.022	.710
両親が褒めてくれるダミー							.263	.111	.096 +
褒めてくれる人増えたダミ ー							.203	.074	.274
両親とも社会のことについ ては話すダミー							.075	.029	.663
社会について話す相手が増 えたダミー							-.226	-.092	.185
保護者事後：子どもと10ト レをやっていて楽しかった							.015	.011	.878
保護者事後：子どもに10ト レをまたやらせたいと思う							.000	.000	.997
保護者事後：「10分トレー ニングマニュアル」は子ども を褒めるコツを掴むのに役 立ったと感じる							-.023	-.017	.789
保護者事後：10分トレー ニングのトレーニングガ利用 ガイド（オレンジの冊子）の 「褒め方のコツ」や「褒め 方、問いかけ例」を、10分ト レーニングの実施に際して 参考にしましたか？							-.036	-.020	.747
調整済み決定係数	.011			.333			.336		
F 値	F=1.650 p=.163			F=10.550 p=.000			F=6.102 p=.001		

\*\*\* $p \leq .001$ 、\*\* $p \leq .01$ 、\* $p \leq .05$ 、+ $p \leq .10$

### 5.1.3 子どもの学力の自信の変化を規定する要因

前節で、介入(10分トレーニング)の活動後の子どもの「考える力」「考えをまとめる力」「考えを伝える力」の自信を規定する要因について検討した。本節では、介入(10分トレーニング)の活動により、「考える力」「考えをまとめる力」「考えを伝える力」に関して自信をつけたのか、を探るべく、「考える力」「考えをまとめる力」「考えを伝える力」の変化を規定する要因を2項ロジスティック回帰分析を用いて検討した。結果は、表6~8までの通りである。

従属変数は、「考える力」「考えをまとめる力」「考えを伝える力」の変化、独立変数は、5.1.2と同様の22変数であり、性別、学年、保護者学歴などの子ども・保護者の属性変数のみの場合(第1段階)、子ども自身の学力の伸びの自己評価や取り組み(児童要因)を追加投入した場合(第2段階)、さらに保護者による取り組みや褒め方(保護者要因)を追加投入した場合(第3段階)に分けて、階層的に検討を行った。

「(介入前と比較して)『考える力』に自信がついた」を従属変数とした場合(表6)、全変数を投入したときが、Cox-Snell R2が、.141、Nagelkerke R2が、.191で最も高く、モデル適合度も、 $P=.050$ で、最も当てはまりのよいため、採択した。「男子ダミー ( $B=-.951, p=.003, \text{オッズ比}=386$ )」は、負の有意な効果が得られた。

「児童事前調査：読書状況【本(マンガを含まない)】 ( $B=-.328, p=.077, \text{オッズ比}=.720$ )」は負の有意傾向の効果、「両親が褒めてくれるダミー ( $B=-1.179, p=.004, \text{オッズ比}=308$ )」は負の有意な効果が得られた。「両親とも社会のことについては話すダミー ( $B=.836, p=.051, \text{オッズ比}=2.306$ )」で、正の有意傾向の効果、「社会について話す相手が増えたダミー ( $B=1.053, p=.011, \text{オッズ比}=2.866$ )」で正の有意な効果が得られた。

日頃から読書を行わない方が、介入(10分トレーニング)を介して、「『考える力』に自信がついた」と感じていることが分かる。また、両親や他者と社会についてコミュニケーションを取ることが、「『考える力』に自信がついた」と感じることに繋がるものと思われる。一方、「両親が褒めてくれるダミー」は負の有意な効果が見られたが、「『考える力』に自信がついた」子どもは自己評価が高いため、両親からの賞賛の影響は少ないものと思われる。

女子の方が、「(介入前と比較して)『考える力』に自信がついた」という傾向が強いことも特徴としてあげられる。

「(介入前と比較して)『考えをまとめる力』に自信がついた」を従属変数とした場合(表7)、全変数を投入したときが、Cox-Snell R2=.114、Nagelkerke R2=.157で最も高い。しかし、モデル適合度： $P=.208$ であり、当てはまりが良くない点は留意する必要がある。「児童事後調査：『考えをまとめる力』が伸びたと思う ( $B=.519, p=.057, \text{オッズ比}=1.680$ )」で、正の有意傾向が得られた。「取り組み多いダミー ( $B=-.700, p=.033, \text{オッズ比}=.497$ )」で、負の有意な効果、「両親が褒めてくれるダミー ( $B=-.692, p=.074, \text{オッズ比}=.500$ )」で、負の有意傾向が得られた。「(介入前と比較して)『考える力』に自信がついた」と同様に、「『考えをまとめる力』に関して自信がついた」子どもは、自己評価が高いこともあり、両親の介入(10分トレーニング)への関わりの影響が小さいことが想定される。

「(介入前と比較して)『考えを伝える力』に自信がついた」を従属変数とした場合(表8)、全変数を投入したときが、Cox-Snell R2が、.200、Nagelkerke R2が、.267で最も高く、モデル適合度： $P=.001$ で、最も当てはまりがよいため、採択した。

「6年生ダミー ( $B=.631, p=.053, \text{オッズ比}=1.880$ )」で、正の有意傾向が得られた。同様に、「児童事後調査：『考えを伝える力』が伸びたと思う ( $B=1.109, p=.000, \text{オッズ比}=3.032$ )」でも、正の有意傾向が得られた。「児童事前調査：読書状況【本(マンガを含まない)】 ( $B=-.513, p=.000, \text{オッズ比}=0.598$ )」は、負の有意な効果が得られた。

最高学年である6年生という立ち位置であるがゆえに、考えを伝える機会が日頃から多く、「考えを伝える力」の重要性を理解していた可能性があるため、自信の変化に繋がったものと思われる。日頃から読書を行わない方が、10分トレーニングの効果を得られたことも予測できる。「(介入前と比較して)『考える力』に自信がついた」同様に、「(介入前と比較して)『考えを伝える力』に自信がついた」場合も、日頃から読書を行っていなかった層の方が、介入(10分トレーニング)を介して、「『考えを伝える力』に自信がついた」と感じていることが分かる。

以上の2項ロジスティック回帰分析の結果を考えると、介入(10分トレーニング)による「考える力」「考えをまとめる力」「考えを伝える力」の自信が変化したのは、日頃から

読書を行わない層であったことが挙げられる。また、「考える力/考えをまとめる力」に関する自己評価が高い場合は、両

親の介入（10分トレーニング）への関わりの影響が小さいとも窺える。

表 6 「『考える力』に自信がついた」の変化を従属変数とした 2 項ロジスティック回帰分析

	B	有意確率	Exp(B)	B	有意確率	Exp(B)	B	有意確率	Exp(B)
(定数)	-.298	.308	.743	-.786	.438	.455	-.916	.554	.400
男子ダメー	-.479	.078 +	.619	-.573	.044 *	.564	-.951	.003 **	.386
6年生ダメー	.326	.245	1.385	.340	.242	1.405	.387	.223	1.473
母親大卒ダメー	.075	.797	1.078	.129	.667	1.138	.116	.726	1.124
父親大卒ダメー	-.081	.789	.922	-.103	.741	.902	-.127	.716	.881
児童事後調査：「考える力」が伸びたと思う				.332	.215	1.394	.389	.186	1.475
児童事後調査：「考えをまとめる力」が伸びたと思う				-.015	.948	.985	.065	.797	1.067
児童事後調査：「考えを伝える力」が伸びたと思う				-.005	.983	.995	-.135	.594	.874
児童事前調査：読書状況（新聞）				-.157	.293	.855	-.164	.322	.849
児童事前調査：読書状況【本（マンガを含まない）】				-.333	.051 +	.717	-.328	.077 +	.720
児童事前調査：読書状況【マンガ】				.115	.376	1.122	.018	.899	1.018
児童事後調査：10分トレーニングが楽しかったと思う				-.127	.607	.881	-.255	.354	.775
児童事後調査：10分トレーニングをまたやりたいと思う				.188	.411	1.207	.397	.116	1.487
母親取り組みダメー							.093	.831	1.098
取り組み多いダメー							.108	.736	1.114
両親が褒めてくれるダメー							-1.179	.004 **	.308
褒めてくれる人増えたダメー							-.159	.717	.853
両親とも社会のことについては話すダメー							.836	.051 +	2.306
社会について話す相手が増えたダメー							1.053	.011 *	2.866
保護者事後調査：子どもと10トレをやっていて楽しかった							.157	.517	1.170
保護者事後調査：子どもに10トレをまたやらせたいと思う							-.298	.185	.742
保護者事後調査：「10分トレーニングマニュアル」は子どもを褒めるコツを掴むのに役立ったと感じる							.063	.768	1.064
保護者事後調査：10分トレーニングのトレーニングガ利用ガイド（オレンジの冊子）の「褒め方のコツ」や「褒め方、問いかけ例」を、10分トレーニングの実施に際して参考にしましたか？							.115	.668	1.122
-2LogL		307.141			297.268			265.204	
Cox-Snell R <sup>2</sup>		0.019			.056			.141	
Nagelkerke R <sup>2</sup>		.026			.076			.191	
モデル適合度		p=.345			p=.345			p=.050	

\*\*\* $p \leq .001$ 、\*\* $p \leq .01$ 、\* $p \leq .05$ 、+ $p \leq .10$

表 7 『考えをまとめる力』に自信がついた」の変化を従属変数とした 2 項ロジスティック回帰分析

	B	有意確率	Exp(B)	B	有意確率	Exp(B)	B	有意確率	Exp(B)
(定数)	-.779	.010 **	.459	-2.531	.018 *	.080	-2.485	.110	.083
男子ダメー	.308	.266	1.360	.297	.302	1.346	.385	.225	1.469
6年生ダメー	.296	.298	1.344	.301	.309	1.351	.217	.496	1.243
母親大卒ダメー	-.205	.488	.815	-.227	.457	.797	-.272	.407	.762
父親大卒ダメー	.044	.886	1.045	.124	.697	1.132	.165	.637	1.179
児童事後調査：「考える力」が伸びたと思う				.087	.743	1.091	.012	.966	1.012
児童事後調査：「考えをまとめる力」が伸びたと思う				.314	.188	1.369	.519	.057 +	1.680
児童事後調査：「考えを伝える力」が伸びたと思う				.028	.906	1.028	-.029	.913	.972
児童事前調査：読書状況（新聞）				-.057	.701	.944	-.011	.945	.989
児童事前調査：読書状況【本（マンガを含まない）】				.150	.401	1.162	.114	.546	1.121
児童事前調査：読書状況【マンガ】				.176	.191	1.192	.220	.139	1.246
児童事後調査：10分トレーニングが楽しかったと思う				-.222	.385	.801	-.367	.205	.693
児童事後調査：10分トレーニングをまたやりたいと思う				-.006	.980	.994	.080	.761	1.083
母親取り組みダメー							-.337	.440	.714
取り組み多いダメー							-.700	.033 *	.497
両親が褒めてくれるダメー							-.692	.074 +	.500
褒めてくれる人増えたダメー							-.043	.924	.958
両親とも社会のことについては話すダメー							-.558	.190	.572
社会について話す相手が増えたダメー							-.630	.133	.533
保護者事後調査：子どもと10トレをやっていて楽しかった							.337	.172	1.401
保護者事後調査：子どもに10トレをまたやらせたいと思う							.123	.589	1.131
保護者事後調査：「10分トレーニングマニュアル」は子どもを褒めるコツを掴むのに役立ったと感じる							-.117	.579	.889
保護者事後調査：10分トレーニングのトレーニングガ利用ガイド（オレンジの冊子）の「褒め方のコツ」や「褒め方、問いかけ例」を、10分トレーニングの実施に際して参考にしましたか？							-.120	.647	.887
-2LogL		299.880			289.924			264.024	
Cox-Snell R <sup>2</sup>		.012			.045			.114	
Nagelkerke R <sup>2</sup>		.016			.062			.157	
モデル適合度		p=.609			p=.564			p=.208	

\*\*\* $p \leq .001$ 、\*\* $p \leq .01$ 、\* $p \leq .05$ 、+ $p \leq .10$

表 8 『考えを伝える力』に自信がついた」の変化を従属変数とした 2 項ロジスティック回帰分析

	B	有意確率	Exp(B)	B	有意確率	Exp(B)	B	有意確率	Exp(B)
(定数)	-.194	.502	.824	-2.309	.033 *	.099	-2.404	.133	.090
男子ダミー	-.102	.703	.903	-.234	.431	.791	-.144	.655	.866
6年生ダミー	.541	.051 +	1.717	.616	.044 *	1.851	.631	.053 +	1.880
母親大卒ダミー	.143	.617	1.154	.090	.775	1.095	.042	.901	1.043
父親大卒ダミー	-.358	.229	.699	-.315	.337	.730	-.235	.507	.790
児童事後調査：「考える力」 が伸びたと思う				.123	.666	1.131	.141	.635	1.152
児童事後調査：「考えをまと める力」が伸びたと思う				-.393	.108	.675	-.359	.169	.699
児童事後調査：「考えを伝え る力」が伸びたと思う				1.103	.000 ***	3.014	1.109	.000 ***	3.032
児童事前調査：読書状況（新聞）				-.205	.189	.815	-.170	.310	.843
児童事前調査：読書状況【本 （マンガを含まない）】				-.533	.004 **	.587	-.513	.000 ***	.598
児童事前調査：読書状況【マ ンガ】				.170	.212	1.185	.158	.281	1.171
児童事後調査：10分トレ ーニングが楽しかったと思う				.200	.460	1.221	.070	.804	1.072
児童事後調査：10分トレ ーニングをまたやりたいと思 う				-.157	.524	.855	-.036	.887	.964
母親取り組みダミー							.315	.478	1.370
取り組み多いダミー							-.028	.933	.973
両親が褒めてくれるダミー							-.468	.227	.626
褒めてくれる人増えたダミ ー							-.019	.967	.982
両親とも社会のことについ ては話すダミー							-.674	.118	.510
社会について話す相手が増 えたダミー							.168	.692	1.182
保護者事後調査：子どもと 10トレをやっていて楽しか った							.128	.612	1.137
保護者事後調査：子どもに 10トレをまたやらせたいと思 う							.015	.949	1.015
保護者事後調査：「10分ト レーニングマニュアル」は 子どもを褒めるコツを掴む のに役立ったと感じる							.072	.748	1.075
保護者事後調査：10分トレ ーニングのトレーニングガ 利用ガイド（オレンジの冊 子）の「褒め方のコツ」や「褒 め方、問いかけ例」を、10分 トレーニングの実施に際し て参考にしましたか？							-.338	.219	.713
-2LogL		314.171			275.112			257.516	
Cox-Snell R <sup>2</sup>		.023			.171			.200	
Nagelkerke R <sup>2</sup>		.031			.228			.267	
モデル適合度		.252			.000			.001	

\*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05, +p<.10

## 6. 結語

本研究では、10分トレーニングを通じた「考える力」「考えをまとめる力」「考えを伝える力」の自信を規定する要因について、検討を行った。

その中で特筆すべき点は2つある。

第1に、10分トレーニングの後の「考える力」「考えをまとめる力」「考えを伝える力」の自信を規定する要因として、日常的に読書を行うことが3つの能力に共通して影響を及ぼしていた(表3~5)。さらに、「考える力」(表3)については両親と社会について話すこと、「考える力」と「考えを伝える力」(表3・6)については両親が子どもを褒めること、これらが規定要因として示唆された。日頃から読書によって知識を蓄え、自分の考えを言語化する習慣があることで「考える力」に自信がつき、さらに両親が褒めてくれることで自ら考えたことを伝えるようになる(=「考えを伝える力」に自信がつく)と考えられる。

第2に、子どもが両親やその他さまざまな人々と社会について話すことで、10分トレーニングによる効果(=新聞を読む効果)が「考える力」に対する自信の向上として現れる点である(表6)。具体的には、子どもが両親と社会について話す習慣がある場合、そうでない場合と比較して2.306倍『考える力』に自信がついた」と実感する傾向にある。また、社会について話す相手が増えたと感じる子どもは、そうでない場合と比較して2.866倍『考える力』に自信がついた」と実感する傾向にある。これは他の変数と比較して相対的に高い影響力である。特に、この結果は両親が褒めることそのものは負の効果が見られるため、両親が誉めていなかった子どもに見られた傾向であった。つまり、ただ親が子どもを褒める「だけ」では効果がない。そうではなく、自信がついたと子どもが実感するためには、子どもが社会に関心を持ち、多くの大人(この場合は、1人でも多くの保護者)と社会について会話をすることが最も重要であることが示唆された。

総合して捉えるならば、保護者が子どもと良好なコミュニケーションをとることで、子どもが自身の考え

を肯定的に捉えることができ、自信が高まる可能性が窺える。褒めることはもちろん大事であると考えられるが、元々自信がある子どもの影響が大きいことも想定され、額面通り受け取ることができない。自信がなかった子どもが自信をつけたり、その変化を実感するためには、大人が社会について新聞を通して、あれこれ話を聞いてあげることが大事なのかもしれない。保護者と子どもとの良好なコミュニケーションを育み、自信をつけるためのきっかけとして、「新聞を読む」という行為が位置づけられるのではないだろうか。

<注>

(1) 心理学では、「自信」という言葉は、自尊感情、有能感、自己肯定感、自己価値感という概念の構成要因として取り上げるため、「自信」を中心テーマとした研究は少数である、という(小野寺2014:p.19)

<付記>

本研究は、九州大学大学院人間環境学研究院教育社会学研究室と西日本新聞社、英進館との令和4年度共同研究「親子の会話が与える『思考力』『判断力』『表現力』育成への影響に関する調査」の成果の一部である。

<謝辞>

調査の実施にあたっては、西日本新聞社営業本部西日本会事務局長 兼 販売局企画開発部金子孝二氏、同販売局企画開発部部次長 兼 西日本会事務局 斉田康隆氏、同こどもタイムズ編集部次長 兼 こどもふれあい本部事務局 福岡県 NIE 推進協議会事務局長 洲之内順三氏、同こどもふれあい本部事務局 二島朋美氏、英進館ホールディングス株式会社 英進館株式会社 常務取締役教務本部長 上尾宏氏、同教務部副長低学年責任者 藤田由香氏の多大なる協力を頂いた(肩書きは調査実施当時のもの)。また、データの結合・集計にあたり、九州大学教育学部2年(調査実施当時)立山皓基さんの多大なる協力を得た。ここに感謝の意を表したい。

<参考文献>

- 大場浩正、甫仮南欧美 (2018) 「小学生の書く力を高め、書くことに自信をもつための指導—日常的な作文指導と短時間完結型作文指導を通して—」『上越教育大学研究紀要』第 38 巻 1 号、pp.95-102.
- お茶の水女子大学 (2014) 「平成 25 年度全国学力・学習状況調査 (きめ細かい調査) の結果を活用した学力に影響を与える要因分析に関する調査研究」 pp.1-249.
- お茶の水女子大学 (2018) 「保護者に対する調査の結果と学力等の関係の専門的な分析に関する調査研究 (平成 29 年度「学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究)」 pp.1-242.
- 小野寺敦子 (2014) 「子どもの自信はどう形成されるのか—乳幼児期に形成される自信の根幹とその発達」『児童心理』第 68 巻 1 号、pp.18-24.
- 郭芳、田中弘美、任セア、史邁 (2018) 「子どもの自己肯定感に及ぼす影響要因に関する実証 研究 : 京都子ども調査をもとに」『評論・社会科学』同志社大学社会学会、pp.15-32.
- 神谷麗奈、磯部由香、平島円、中村由紀子 (2015) 「小学生の調理技能の習得と家庭での調理実践を重視した授業の効果」『日本食育学会誌』第 9 巻 4 号、pp.321-331.
- 木村拓也、陣内未来、坂巻文彩、徳永真直、西郡大、中世古貴彦 (2023) 「『新聞を読む習慣による学力向上』を巡る計量分析—新聞を媒介にした親子コミュニケーションの変化と学力との関係性に注目した多変量解析—」『九州大学大学院教育学研究紀要』第 25 号、pp.27-70.
- 国立教育政策研究所 (2023) 「令和 5 年度 全国学力・学習状況調査の結果 : 質問紙調査」  
[https://www.nier.go.jp/23chousakekkahoukoku/report/data/23summary\\_zentai.pdf](https://www.nier.go.jp/23chousakekkahoukoku/report/data/23summary_zentai.pdf) (最終検索日 2023 年 8 月 12 日)
- 内閣府 (2019) 「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査 (平成 30 年度)」 pp.1-253.  
<https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/ishiki/h30/pdf-index.html> (最終検索日 2023 年 8 月 12 日)
- 浜野隆 (2009) 「家庭での環境・生活と子どもの学力」『教育格差の発生・解消に関する調査研究報告書』ベネッセ教育総合研究書、pp.64-75.
- 福澤周亮、平山祐一郎 (2009) 『Reading-Test 全国標準読書力診断検査』図書文化社
- ベネッセホールディングスブランド広報部 (2019) 「【小学生の読書に関する実態調査・研究】幅広い読書が『思考力』や『創造性』にプラス効果」  
[https://berd.benesse.jp/up\\_images/textarea/bigdata/20191025manabilnewsletter.pdf](https://berd.benesse.jp/up_images/textarea/bigdata/20191025manabilnewsletter.pdf)
- 松田雅代、溝邊和成 (2019) 「児童の保有概念と自信度に関する研究 —小学校第 4 学年理科授業の事例分析を通して—」『日本教科教育学会誌』第 42 巻 2 号、p.65-76.
- 文部科学省・国立教育政策研究所 (2021) 「令和 2 年度全国学力・学習状況調査報告書 質問紙調査」 pp.1-208.
- 文部科学省・国立教育政策研究所 (2019) 「OECD 生徒の学習到達度調査 2018 年調査 (PISA2018) のポイント」 pp.1-16.  
[https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2018/01\\_point.pdf](https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2018/01_point.pdf) (最終検索日 2023 年 8 月 12 日)